

〔翻刻〕柳の糸（下・一）

堀文庫研究会
（代表・田中則雄）

島根大学附属図書館堀文庫所蔵の後期読本の中から、小枝繁作『卅二回鑑柳の糸』（文化六年刊）を翻刻する。全五巻のうち、前号までに掲載した巻一〜三に続き、本号には巻四を収録する。

卅二回鑑柳の糸巻之四
榊村奇伝

東都 敵離陳人 戯編

第七回

芳野山に當吉舅を失ふ
岩田川に景肱親を慕ふ

茲こゝに阿古根あこなの夜叉丸やしやまるは、阿修羅王あしゅらわうを誅ころめしかど、さら
に用もちひすして終つひに喜三太きさうだがもとに赴おもむきにけれど、おのれ
は山塞さんさいに止まり居みて其音問そのおとづをまつ処ところに、二更にがうの頃頃ほひに
至いたり、阿修羅王あしゅらわうに陪そ從ぞう行ぎやうし小賊等こぬふらおひくくに馳はり報うけ
るは、「大王喜三太だいわうきさうだが家いへに行ゆ給たまひしに、何なんぞ料はかるべき、彼
偽いつはりの謀はかりごとをもうけ、酒さけを勸すすめていたく醉よほしまいらせ、
平太郎へいたらうと云いへる健すこやかなる壮わかうと俠ふみ、不意ふいに起おこり出いで、無残むざんに
も大王だいわうを討うちとり奉たてまつりたり。わが們ともは是これを救すくひまいらせん
とせしを、予かねて彼かれ邑人さとひとを埋まい伏ふくさし置おき、俄にわかに発おこつて我々われ々と戦たたか
ひひ二に才さいつるうち、平太郎へいたらう大王だいわうの首くびを肩かた尖な刀なたの切き先さきに刺つ貫つらぬ
き走はしり出いでしほどに、各おのづかに是これに気きおくれてたゆとふうち、彼
們とも勢いきほひに乗のりじ斬きつてかゝるに、叶かなはずして、心こゝろにもあら
で逃にげ帰かへりぬ」と告つげたりしかば、夜叉丸やしやまる驚おどろきながらも、「さ
ればこそ我われ斯かくあらむと予かねて想おもへば、さまぐに諫いさめしかど、

さらに聴給はで、今斯のごときに及べり。かゝれば今にも彼們此山塞におしよせ来ぬべし。急きそのもうけして、彼平太郎等を討取、阿修羅王が怨みを報ゆべし。汝等もわが命を聞て、ともに仇を報ひよ」とあるに、小賊等渾一般に答けるは、「宣はする処道理には待れとも、彼平太郎と云は尋常ならぬ丈夫なれば、おそらくは勝事能ふまじ。某等が愚なる心をもて謀るときは、ひとまづ此山塞を退き彼が英気を避け、其去るを待て再びこゝに集ひ、謀を做んはいかに候やらん」と云。夜叉丸頭を二ウうちふり、「そは官兵などの責來る時の謀なり。故奈何となれば、官兵は只我等を追捕するを功としつれば、山塞空虚なるときは、速に都へ還り登り。そも〳〵平太郎と云は、当初卅三間堂再建の奉行たりし横曾根兵衛尉が男兒にて、阿修羅王とわれとをば深き仇とねるふ徒なり。されば汝等も某等が手につくものなれば、殺し尽ずしては去らざるの敵なるを、官兵のことく心得たらんは然るべからず」と云聞ふるに、小賊等初てその深き仇なるを知り驚きまどひ、「わが輩さる縁故をは知らで、目今のこどくは申つる也。爾るときはまづ奈何なる謀をもて

か防玉ふ。夜叉丸小賊等が渾心を定めたるを看云出けるは、「わが謀と云は別にあらず。まづ此地方を落失たる光景にもてなし、或は深き林の裡、或は岩陰などに埋伏し、一人も山塞ニオにおらざる時は、呂人等是を看て、官兵の至りしときのごとく心得、山塞に火を放つて焼べし。その時その火の光りを相図にし、不意に発て帰路を遮り責めば、前にはわれ〳〵あり、後に火ありて、進退途を失ふべし。是ひとへに網の中の魚におなじく、一人も生きて帰るものはあらし。汝等敬て怠ることなかれ」と下知するに、小賊喜んでこれを領承し、俄に山塞を立ち、此処の岩かげ彼所の林の裡に埋伏しつ、平太郎かよするをぞ待たりけり。

却説這裡には、平太郎、庄司、喜三太の三人は、郷の仕俣等を將て山塞におし寄、前後を取囲み関を揚て責入しかど、裡には一人の人影だもあらざるに、人々あきれ、「こは奈何」と不審ば、喜三太、平太郎庄司に對ひ、「此悪強盗いつも官兵の來るときは逃去り候なるが、這回もその謀をなしつるにこそ。さらばまづ山塞を焼はらひ、再び來り住むを待て討に不如」とニウいひ聞ふる

に、人々は、さりともと思ひこふで来りしに案に相違しつれば、いと乏赴、「せめての心ゆかせにそは然るべし」といひつゝ、各手に火を放ち、勝鬨を上げて一般に山を下らんと、既に山の半まで来る処に、想ひもかけず左右の岩かげ、又は林の裡より多勢の山賊等現れ出、行先を遮り闘を作つて斬てかゝれば、郷人等大に驚き、後の方へ走らんとするに、此時山塞の火盛んにして、逃るべうはあらぬに、左右は屏風を建たるがごとき処なれば、進退此処に極て奈何とも詮すべなし。平太郎當吉この光景を見て牙を嚙拳を握り、「われ鈍して賊の為に此謀に陥されつるこそ易からね。いで此悪強盜等を追退かさすはあるへからず」と、おのれ真先に進み、長刀を水車に転し、群がりかゝる山賊の中へ面もふらず討て入り、中るを幸なきたて／＼戦ひしかば、さすがにはやるやまだちも、あしらひかねてたぢろく処を、庄(三才)司、喜三太これを見て、郷人等を励ましつゝ、咄つと叫ひて討てかゝれば、などて少しもたゆとふへき、散々になつて逃行を、人々は勢に乘じ、のがすまじと追行しに、土地案内の山賊等何地へ去けん、はやくもその行衛を失ひしかば、平

太郎は夜叉丸を討洩らしつるを無念に想ふといへども、賊をば既に十余人を討とりぬ。味方を点検するに、傷を蒙るものは七八人に及ひつれど、討れやしつると覚えて、形の見えざるもの三人あり。然るにその三人のうちに庄司も入りしかば、平太郎易き心なく、「われはる／＼と此地方に来つるは、専ら舅を伴なはんが為なるを、今此人を失ひては、こゝに來りし詮もなく、妻子にいふへき言葉なし。こは無念の事なり。せめてはその屍なりとも探し出さめ」とするに、喜三太をはじめ郷人等もその心の裡を想ひやり、ともに憐を催していふやう、「庄司どのゝみへずなり給ふも、素われ／＼(三ウ)が為をおぼしてより発りし事なれば、己が們も諸共に搜索まいらすべし」と、平太郎が跡につき再び山に登りつゝ、まづ山塞の焼跡をはじめ前刻に賊を追ひし所など隈なく捜しつるに、只有谷影に人の叫く声の聞えしかば、當吉怪しみこれを望み見るに、荆棘生茂りてさだかに看へねば、蔦葛にとり携り谷底に下りてその人を引起し見るに、渾身鮮血にまみれたれど、まがふかたなき舅なれば、驚きまどひ、声を励し、「やよいかに、庄司のぬし。こは奈何して此過失をばせ

さし給ふ」と呼叫べば、庄司睡れる目をひらき、いと苦しげなる声にて、「嗚呼當吉の君におはすかの。さても年老つる身ほど甲斐なきものは候はじ。某前刻山賊等を逐つて此所まで来りしに、不図も径を踏あやまち、此谷底へ転び落岩角に触て斯る疵をば蒙りぬ。かくては命助すべうはおぼえはべらじ。われ死失ぬと云ことを、女兒卯(四才)挿絵(四ウ・五才)木が聞ならば、心細くて嘆くらめ。今より後は杖とも想ひ柱ともたのみ申は君ならで外に便りのあらぬ身を、不便と覺し、願くは彼が不肖を見ゆるし給ひ、ながく妹背のかたらひをかはらせたびな、婿君よ。死ぬる今般に及びても、只此事をのみ思はれて、心苦しう候ぞや。さそ此外にまたひとつ頼みまいらす事のはへるなり。昨夜桜女おん身を慕ひわが臥所に忍ひ来りしに、人差へなれば恥らひて、既に死べく見えしほどに、おん心の心はしらね共その心根の便なさに、一夜のあふせは我はからひ得さすべしといひなだめて帰らしつるが、われかくなりぬと聞かば、頼みなくおもひ死んずるもはからねば、彼児が望みをも果さしやりね。斯頼みまいらすも、桜女が執念わが子が身にやかゝらんかと想ひすこしをす



卷四 四ウ・五才

ればなり。兎にも角にも子を想ふ親の心の愚かさば、雌々しくもまたはづかしきことをのみ聞え申なり。必ず悪み給ひそ。嗚呼名残惜(五ウ)の憂世や」と云も恩愛子を想ふ聞には心も眼もくれて、涙に声もあやなきは、実にも憐の光景なり。平太郎當吉首尾を聞くに哀みを催し、そぞろの涙に眼を霑しつるが、やをら言葉正し、「われ不肖なりといへども、少しくは聖の経を説て粗道理を聞けり。高位の人はその位によつて妻妾かずあり。某がこときは匹夫なり。是一夫にして一婦あるは相当の処なり。われには既に卯木といふ妻あれば、など他女を愛へきや。よし舅の命を聴て彼桜女と仮の契を結び妨なしと想ふとも、これやおのれを知らざるの誹を受けるのみか、ながく姪夫の汚名を蒙れば、この事におきては奈何宣すとも、得こそ諾ひ申さるべき。且卯木がことは其去所なきの婦なるさへに、一子を産したる間なれば、いかで看すつべき。是等の事をば心にかけて、志を勵し傷を愈し給はんやうこそあらまほし」と云へば、庄司は嬉しげに完爾としつゝ「天才ものいひたげに看ゆれども、漸々に弱る重傷に、終にはかなくなりけり。當吉は甲斐なき舅が光景に心た

ゆみ、涙さへはふり落ちて躊躇間に、喜三太をはじめ郷人等は看へすといひし郷人の屍をさがし出せど、當吉が登り来ざるに不審つゝ、俄に大きやかなる畚を索来て、これに一兩人を乗らし谷底に下しつるに、彼們平太郎が庄司の屍を抱ひて嘆き居るを看て驚き、當吉を諫め、「斯ておはすも然るべからねば、庄司どの、屍をば此畚に上て彼所に引上さし、喜三太と商義して兎も角もはからひ給へ」と勸むるに、平太郎衷もと心つき、「そは然り」といひつゝ、庄司が屍を畚に乗し、己れをはじめ郷人は萬葛にとりすがり辛じて山に上り、彼畚を引上しかば、喜三太等庄司が屍を看てこよなく驚き、平太郎に對ひて縁故を問へば、當吉、「爾々也」と、谷底にての(六ウ)体たらくを細やかに回答すれば、人々は且驚き且憐み、俱に愁ひて言語なし。此時喜三太云ひ出けるやうは、「御喚きはさることながら、今はいかに想ひ給ふとも詮なし。此上は庄司どの、屍をば茶毘の烟ともし、亡跡を用ひ給ふこそ孝養とおぼゆるに、まづ某が家に帰り給ひ、寛やかに事を計り給へ」と諫るにぞ、平太郎も今さらに何となすべきやうもなく、喜三太が諫るにまかせ、屍をかき荷

ひ喜三太が家に帰れば、郷人等も彼二人が屍を昇ひ郷に帰り、さて道徳ある知識を頼み葬式の事と取り行ひ、終に一片の烟となし、その白骨を袋に収め、これを將て熊野に帰らんとはしつれど、舅の仇なる夜叉丸いまだ此処にかゝつらひ居るもはかられねば、其行衛を捜さんと、身をやつしてさまざまに搜索しかど、絶て其所在を知らざれば、妻の待わびんも懶しと、庄司が白骨を首に「モオ」かけ、喜三太等に別れを告げ、熊野にこそは還り去りけり。

こゝに喜三太が女兒桜女は、當吉を恋すること大かたならで、前夜は既に當吉が臥所に忍び行て心さまの程を云聞えんとしつるに、あらぬ庄司が臥所にて、深く恥らひ、自害すべくせしを、庄司が好意により死を止まり、一回の逢瀬はあるものをと、心樂くありしに、頼みに思ふ庄司不図非命の死を遂しかば、只是沖に漂ふ船の楫を流し、引詰し弓の強を断たるがごとく、今は是までと覚悟を極しかど、當吉なをわが家にあれば、もし逢よしもあらんかと、心ひかれてありけるに、是も俄に熊野に還りつれば、今は頼みも綱もきれ果て、心煩らはしく、終

に重き病着とはなりぬ。父母は女兒が心をしらねば、こはいかなる病ぞやと、世に聞えある医師のかぎりを尽し、あらゆる神「モウ」仏を祈り、病ひの怠らんやうを願ひけれど、露ばかりもその験の看へねば、昼夜枕の辺りを去らで心を悩し、「この児もしなき人の数にも入らば、われは何となるべきぞ。夫婦が過世悪てや、子といふは只二人ならでなかりしを、姉は妖怪の為に命を失ひ、此児は強盜に攫るべかりしを幸を得て免かれ、あな嬉しやと思ふや想はざるに、この病にかゝること、奈何なる因過の報かや」と泣哀しむに、桜女も親の嘆を見るに忍びず、心裡に想ふやう、「わが思ひのほどを聞へずして死んは不孝の所為なれば、露ばかりは聞え置ばや」と、密に母に告知らしつれば、母はおどろき、「さることにしあらば、などてとくにも云は聞へざりしぞ。命にかへんといふに、何まれ叶はざることのあるべき。平太郎どのよしや妻ありとも、縁故をいはんに、岩木にもあらぬ身の、なでう承引ざることのあるべき。よし／＼そのことなら（八）喜三太のとも商議し、よきに計らひ得さすべきに、心強く想ひ、速に病の怠るやうこそあらまほ

し」といふに、桜女はわが姪戯を告げ、父母の疎み給はんと想ひの外に、母の言語を聞き、嬉し涙に胸ふたがり、回答をばせて、父母の恩を感佩しつ、只手をあはせて伏し拝みぬ。母は侍女等に、「女兒が心の慰むやうにとぎせよ」といひつゝ、桜女が閨を立ち出、夫喜三太に爾々の旨を物語しつれば、父も同じ心にて、「さることにしあらば、病の怠り果るを待て熊野に誘引ゆき、平太郎に遭て道理を説ば、せめては妾ともならんずるに、此事はやく女兒に聞して心を慰ませよ」とあるに、妻はよろこびいそ／＼とし、再び桜女が閨に行、父の心ばへの程を聞へしかば、女兒が喜び比ふるにもなく、是よりして漸々に病は怠りてぞ看へりけり。

却説這裡平太郎當ハウ吉、庄司が白骨を將て熊野に還り、吉野にて仇岩淵時澄を討しことを首とし、庄司が没命体たらくを細やかに妻に語れば、一たびは喜び一たびは悲しみ、ふかく父が非命の死を悔ひ嘆きけるを、當吉さま／＼に諫め、斯てもあるべきにあらねば、なく／＼も庄司が白骨をば当国高野山に納め、跡念比に吊ひけり。

斯てその年も程なく暮て明る春にもなりしかば、平太郎當吉は熟々わが身のうへを思惟するに、「卯木と夫婦となりて、昨ふ今ふとおもふうちにはや五年に及び、緑丸三才にぞなりぬ。此うち父か仇時澄を討たるばかりにて、蓮華坊が白骨と卅三間堂の棟材となるべき木を尋ね出すこと能はず。且海賊阿古根の夜叉丸はひとかたならぬ仇ながら、これを討得ず空しく光陰を過し（九才）挿絵（九ウ）十才）つるを悔ひ、今よりは怠らず事を務んと想へど、みなその所在をしらねば、こは仏神の加護によらでは叶はず」と、熊野三所の権現はさらなり、那智の観音をはじめ奉りあらゆる神や仏を頼まいらせ、功の速やかにらんことをぞ祈りけり。

こゝに卯木が乳人なるものは、女ながらも是まで万甲斐々々しくて、當吉夫婦を養ひ、さまでの不自由はさせでありしが、年既に六十に余り、この程風のこゝちすとしてかりそめに寐たりしに、定業のしからしむる処なるにや、葉餌の験も見へで、終にむなしくなりにけり。卯木はさらなり、平太郎も彼が忠信て給仕資助する志を慕ひ惜しみ、便なきことに想ひ、夫婦なく／＼かたばかり



卷四 九ウ・十オ

なる送葬しつ、心の限り後念比に吊らひ、彼か一子は替にて都にあることを聞及ひしかは、彼所へ（十ウ）も人をもてしらしやりぬ。かゝりける後は誰ありて夫婦を貢ぎ養ふものなかりしかば、今はやうやく飢餓に及ぶべうなりつれば、斯ては此後のこと覚束なく、いかにせんと心を悩しけれど、平太郎は原都の産といひ殊に官人の子なれば、今零落たれど、下さまの事に疎く、又卵木も此鄙に成生はしつれど、良家の愛子にて深窓に養はれし身なれば、賤の手業になれず、夫婦ともに才貌は世に勝れながら、今日を送る生業に術なく、兎やせまじかくやせまじとおもひ煩ひけるが、あまりの詮すべなさに、平太郎は手藝し業なればとて、心にはあらざれど、山に入りて鳥獸を射とりこれを市に鬻きその日の食に易へ、卵木も女の業なれば、糸とり機織で纒なる値をとり、百折千磨の苦しみを（十一オ）しつ、かそけき煙をたてにけり。是前生の獵夫夫婦が因縁こゝに顕しぬ。

話休絮煩、再説阿古根夜叉丸は、去頃吉野にて平太郎當吉を討取らんとしたりしかど、彼が勇猛に敵しがたく、却て敗走し、山寨をば焼れつ、立止るに所なく、

そのまゝ吉野を立ち、又南海に來りて賊となり、海にありては客船を劫かし、又陸にありては剪徑となり、行客を悩しけり。然るに卯木が乳人の子を景旽といひて、都にて琵琶法師となりてありしが、這回母の没命ぬと聞、いと泣して想ふやう、「われ不具の身にして、一人の母を養ふことあたはず、速く隔り居て先途を見届さるこそ無念の所為なれ。せめてはその墓に詣で亡跡の追善を吊らばばや」と、「此年ころ貯へし金銀をもて追善の料ともせばや」と、これを千一匁懐にしつ、心細くも只独り、都の空を跡になし、故郷をさして行雲の、錦にあらぬ旅衣、紀の路は何処三熊野の、岩田川と志す、比は二月末つかた、まだ肌寒き春風に、散しう梅は雪かとも、踏わき行や足曳の、山崎こへて摂津国や、身のよしあしも難波津を、過て程なき和歌の浦、みるめ苅ばやなき母の、塚はいづこにありそ海、そこさへ看へぬ、警の身を、恨みわびつゝ一条の、かそけき杖を力とし、漸々熊野に着にけり。景旽は幼なくて故郷を放れ都にて成長つれば、いづくかわが家なるをしらねば、往還の人に問つゝ行くにぞ道はかゆかで、既に日暮に及びしか

ば、尋ね問べきよすがもなく、とある木の下に佇みて、人の来るをまち居たり。この折から阿古根の夜叉丸は手下の賊三四人を將て、各手に松明燈しつれ此処を過行又ノ十二おけるを、景旽人足の響を聞て心喜び、これを呼留て問へりけるは、「某は京の琵琶法師にてはべるが、故郷は此熊野の岩田川の辺りなるが、此程母没命ぬと聞はるぐと下りしかど、幼なくて都へ登り、その後絶て帰り来ざれば、岩田川は何処とも弁へず候。あはれ彼所を教へ給はれ」とあるに、夜叉丸心の裡には、「此琵琶法師母の喪に帰り来るほどのものなれば、少くは貯もあるべし。こはよき獲ものなり」と、完爾としつ、わざと声を和らげ、「盲人の独旅を見まいらすに、殊に日も暮つれば、さぞな尋ねわび給ひつらん。某等は幸岩田川までまかるものなれば、導しまいらすべし。いざ給へ」といひつゝ手をとれば、景旽ふかく歎び、厚く謝をのべて誘引れゆくに、岩田川へは行ずして、人跡稀なる山ふとこりに進行ぬ。此時ははや初夜の比及なれば、獵夫(又ノ十二)樵夫(又ノ十二)だもおらずなりぬれば、夜叉丸心ゆり景旽に對ひ、「まだ岩田川へは程あれば、まづ暫し休ひ給へ」と、岩角に腰

をかけさし、さて云出けるは、「いかに御房、この処を何方と思ひ給ふや」景暎、「前にも申すごとく、幼なくて此國を出たるさへあるに、瞽のことなれば、などてよく弁へ侍らん」と回答すれば、夜叉丸呵々とうち笑ひ、「瞽はさかしきものと聞つるが、汝は鈍くて幸あるにこそ」といふに怪しき、「こは心を得ぬ事をいひ給ふものかな。それは鈍くて幸ありとは何等の幸ぞ。聞し給へ」とあれば、「さればとよ。われはこの地方に住む剪徑にて、汝が懐にせる金を奪はん為、岩田川へ誘引行んと欺き、此山中に牽来れり。もしさきにわが們を怪しき逃んとせば、忽ち斬殺すべかりしに、騙かざるゝをしらで鈍くも此処まで来つるにより、二つなき命を保つと云ものなり。こゝをもて幸あるものとは十二三といふなり。しかはあれ今にもその金を与へまじとあらがはゞ、只一刀の下に兩段となるべきに、いかに心よくその金を与へよ」と云聞ふれば、景暎愕然と驚き、俄に渾身を戦々、しばし回應なくでありしを、「いかにぞや〜」といそがすに、齒の根もあはで、やをら云出けるは、「あな恐し。さてはおん身は剪徑にておはしつるよ。某は貧しき盲人なれば、金などいふもの

はさらになし。あゝゆるし給へ〜」と云つゝも、盲さがしにそこらかゞぐり逃退んとするを、夜叉丸是を見て、手下の小賊等に目配すれば、早その心を得て、行前を遮りとゞめ、景暎が懐に手をさし入れて金を奪はんとするを、その手をさゝへ、「こは何をかし給ふ」といへば、「棟梁の今宣すごとく、汝が金をとらんとするのみ。命をば助け得さすぞ」と、荒げなく搭膊を引出せば、景暎今は免(十二三)れがたきをしり、「まづ待給へ。何をか包まん、些ばかりの金は此搭膊にあれど、是はこれ某たゞ一人の母の候なるが、子といふはわれのみなり。然るに見給へるごとく盲人のことなれば、親を養ふことあたはず。幼なきより都に登り音曲を学び、漸やく琵琶法師となりつれば、奈何にもして母を都へ呼上し、一日なりと養はばやと、百折千磨を凌ぎて纒なる金を貯へたれば、今日や迎へん明日や呼び上さんと想ふにも、道隔たれば心のまゝにもならずうち過けるに、前日母没命ぬと聞くに哀しく、千度百度悔ひ嘆ども、とても返らぬ道とあきつめ、是まで心を尽し孝養の儲にせんと貯へし金なれば、古人の劍を塚に懸しには似ざれど、母が塚に詣て是を供へ

追善の當をなさばやと、遙々都より携し金なり。斯のごときの(十三才)縁故なれば、少しく憐をたれ給ひ、わが志を果さしてよ」と、涙ながらに聞ゆれば、夜叉丸あさみ笑、「汝その金をもて追善をせんとならば、狼に法衣着せたるがごとき当世の法師等に施さんよりは、われに与へよ。爾するときは、その金をもて幾許かの楽しみに極めて飲ばゞ、これに過たる供養はあらじ」と、いとねぢけたる道理をほこりがにいふに、景疏「涙ながらに、「斯まで頼みまいらするに承引給はざるうへはすべなし。此金を得るとも生涯を易ふはおくり給はじ。されど深く想ひをかけ給ひたるを与へざるも罪作りなれば、残りなくまいらすなり。さりながらわれに一つの望みあり。それは奈何となれば、某を岩田川に俱したまはれ。彼所に至らんずるときは、是を与へ申さん」とあるに、夜叉丸「汝われを疑ひきは云(十三才)とおぼゆ。そもわれを誰とか想ふ。海賊の大将阿古根の夜叉丸といふものなり。必ず言は差はじ。まづその金を与ふべし」といへど、「否又も欺き給ふべければ、彼所に至らではまいらすまじ」と、搭膊を握りて放ねば、夜叉丸焦燥、「われかほどまでこ

とを弁て云をも聞わきなきうへは、心にはあらねども斯こそすれ」といひさま、佩たる刀を抜かと思へば、肩の尖より乳の下までさと斬放つにぞ、など少剋も堪ゆべきや、「阿」と云声ともるともに仰さまに仆れて、鮮血滾々と流出たり。夜叉丸はかや〜と打笑ひ、「こはわが殺すにはあらず。みな汝が心よりする処なり。たとへば天に向て唾吐がごとく、己に出たるものは己に帰るとはしらざるや。汝われを欺んとするにより、やむことなくかくのごとくには及べり」と飽までに嘲り、手下の小賊等に分附かの(十四才)金を取らんとする折から、木立茂りたる林の裡より、弦音高く聞えて一条の箭飛来り、只今手を下さんとする賊の胸さかをぐさと射貫き、背後に矢尻看へしかば、なじかはもて堪らるべき、二言ともなく只一声「阿」と云つてぞ失にけり。夜叉丸をはじめ手下の賊等この光景を看つ大に不審、矢の来しかたを瞻望ば、又一条の箭ひやうと響て、這回は夜叉丸が松明ふりもてる手をかすり、後にありける大木の松に矢中節せめてぞ立たりしかは、みな戦き怕れてたゆとふ処に、林の裡より一個の漢子現れ出たり。其出扮奈何となれば、頭



卷四 十五ウ・十六才



卷四 十六ウ・十七才

に一頂の山おか頭巾を戴き、身には一領の熊の皮の袷を穿、腰に一具の鹿の鞋子を纏ひ、一口の大腰刀を帯み、手に弓矢を携へたり。忽ち夜叉丸を見て、弓矢を撲地と投(十四ウ)捨つ、氷なす大腰刀を抜かざし、ものをも云ず切てかゝれば、夜叉丸慌忙抜合せ、火花を散らして打相たり。戦こと既に十余合にして、夜叉丸が刀法乱れ負色看へしかば、手下の小賊等これを助んと四方をとり囲み討てかゝれば、彼漢子蝶鳥などの飛ごとく、此方を討ては彼方を払ひ、一盞茶時に手負多く出来つれば、今ははや敵しがたくや思ひけめ、夜叉丸まづ一番に身を転へして逃退けば、棟梁さへ斯のごとくなれば、手下の小賊等などでよく戦ふことをせんや、只蜘蛛の子を散すがごとく四方に散て逃去りぬ。そも此丈夫はこれ何等の人ぞといふに、則横曾根平太郎當吉なり。今日しも山にわけのぼり、獵をして還るさ、此地方を過つるに、夜叉丸なりと名乗を聞て、怪しみつ立留まりて是を窺ふに、一人の盲人を殺さんと(十五才)挿絵(十五ウ・十六才)挿絵(十六ウ・十七才)するを見て、矢を放つてこれを助け、なを夜叉丸を討んと、かく戦をばなしけるなり。

第八回 獵夫矢を發て警者を恤る
山賊結を贈て夫婦をお救す

其時平太郎當吉、賊等を遂行んとしつれど、今までありける松明はみな賊等が焼し持つるゆへ、逃去りての跡は咫尺も弁ぬ黑夜となれば、心は勇猛にはやれども、行衛しれねば詮すべなく、立帰らんとしたりしが、忽ち足にまつはるゝものあり。いかなるものぞと拾ひあぐれば、紐ありて彼方にて引がごとくなれば、いと怪しみながら探り看るに、一個の搭膊なり。裡には幾兩かの黄金あるとおぼえしかば、「こは盜賊の奪ひし金を落し置つるやらん。斯のごとき不義の金は手に(十七ウ)触るゝも穢らはし」と、そのまゝ其処に投捨れば、搭膊と同じく撲地と倒るゝものあり。こゝにおゐて當吉深く怪かり、再びその響のする処を撈すに、手に障るものあり。心を静め探り看るに全く人なりしかば、「此は前に射たりし弓の手ごたへし

つるが、扱は一人の賊をば射殺しけるにや。これにつけても彼盲人はいかになりつるやらん。もし景暎にてはなきや」など想ふ折から、山の端に出る下弦の月の朧影にすかしみれば、若き法師の琵琶を背負たるが、赤に染みて、手に搭膊の紐を楚と握り倒れ居るにこそ、驚きおもふやう、「こは景暎に差はじ」と浅猿く、いそぎ抱き起しつ、菓など含まし、声高やかにして呼生せば、やをらその声の聞へてや「阿々」と叫び、いと苦しげなる息を衝、「われを呼生すは、剪径等のまたも十八才来て身己のものを奪ふにや。瞽の身を斯までうきめを看するは何事ぞ。人の想ひはありと想ふや、無きと思ふか。みよ〜今にしらすべし」といきまきて罵れば、當吉方見ことに想ひ、「あな便なや。縁故をしらぬさへに、盲人の事なれば、爾疑ひ腹たつも宜なり。苦しくとも心を静めて、わがいふことをよく聞ね。某はさらにさる正なきことをするものにあらず。今零落て獵夫とはなりつれど、故は院の北面横曾根兵衛尉光當が男児平太郎當吉といふものなり。是名乗るべきにはあらねど、盲人のわれを疑ひ恨んことの不便さに、云聞ゆなり。汝は素此国の産にて幼な

くて都に登り琵琶法師となり、今の名を景暎といはずや」とあるにうち驚き、「さてはわが母の養育まいらせつる卯木のぬしの良人十八才にておはしつるよ。只今の僂忽はみゆるしたまへ。そも某が身のうへをばいかに知しめしけん」と怪しむに、當吉、「問ずともいはで止べきにあらねば、汝が母のいひつることを聞ゆべきに」といはんとしたりしが、胸ふたがり涙さしぐみて暫時言語なく、目をしばたゝきてありけるが、やゝありて鼻うちかみつ云出けるは、「われ不図禍にかゝり、父は自害して果給ひき。その後此処にありて時をまつ身となりしかど、今日を過すべき術なきを、汝が母これを憐み、われ〜夫婦を扶持みつ、此年頃資助おきつるが、去頃風のこゝちすとして病にかゝりしを、仮初のことと想ひつるに、漸々に重やかになり、菓餌の験もなく既に臨終に及びしとき、われ〜夫婦を枕に近づけ云聞えつるやうは、『是までは啗に告まいらせずありしが、奴家か子に景暎といへる（十九才ものゝはべりぬ。此児が五才のときとおぼえ候、郷の童子と礫を投るを戯れとして遊びつるに、過失て眼に中りいたく悩みぬるを、庄司の老爺ふかく憂恤給ひ、さま

くゝの治療をなさし給ひしかど、その驗なく終に盲人となりはへりしを、かくてはひとり世を渡るに便なしとて、多くの黄金をつけ都に登し、琵琶法師の弟子とせさし給ひしが、近頃やゝその業に熟し、人にも用ひられて世渡に易くやなりけん、奴家にも都へ登れかし、養ひ置んと幾回かいひこしけれど、卯木のぬしの今便なくおはずをふりすてまいらせ、など都に登らるべきと回答してけるに、彼も昔の恩を想ひ出し、養ひまゐらすべき衣食の料を贈りこし侍べりぬ。此事はこれまで露ばかりもしらしまいらさで過しかど、今はなき身となりはつれば、聞へ十九ウ置まいらすなり。わが子ながらも景晷は心忠信しきものなれば、わが亡後に尋ね来るとき、御身のうへを告給ひ、盲人ながらも力となりまいらすべし。又奴家がことをよく聞し給へ」と遺言して辞世つれば、速に汝がもとに云送れり」と、いと懇懃に物語れば、景晷母の臨終の言葉を聞き、泣しさ弥増り涙滝つせをなして嘆きしが、やゝありて涙をとらめ、「宜すごとく某幼なくて明を喪ひ廢人となりしかど、いま斯人となりて渡世を易ふること、是渾庄司公の鴻恩によれり。その

令愛卯木のぬし御夫婦落給ひぬと、母のいひこしつれば、などてしらず顔すべき。力の及ぶ限りみつぎまいらせんとは想へど、甲斐なき盲目のことなれば、心ばかりにて、さぞ懶やおぼされんと、明暮心にかゝりしに、前日母は失にきと聞泣しはいかならん。五才のときに二十才別れしまゝ、只一日の孝もせて廿年あまりうち絶ては参さへせぬ不幸のほど、かへらぬことなれば、せめてはその墓に詣ふて、然るべき智識を頼み追善をも営ひ、母が志を嗣ひて御夫婦をば都に誘ひ心の限り養ひまいらせんと、想ひ決て下りしに、纒なる追善料を盜賊にみいられ、かく重傷を瘡つれば、とても生べしとは想ひもよらじ」と云つゝも、首にかけたる搭膊をはずしこれを當吉に与へ、「いと畏みたることには侍れど、こは母が追善を當まんと携へ来つる黄金なれば、これをもて母が菩提を吊ひてたべかし」と、云も苦しく声細り便り少く看へしかば、當吉憐を催して、われにもあらで声くもらし、「やよきな心弱な思ひそ。此傷は重やかにのみゆれど、みな究所をはづれたれば、治療を施さば、本腹せんこと疑ひ二十ウなし。いざ俱はん」とすゝむれど、

よはり果ては回答する声さへ出ず、手を合せ涙玉なすばかりにて、憐はかなきみくまの艸葉における白露、ともに消てぞ失にけり。

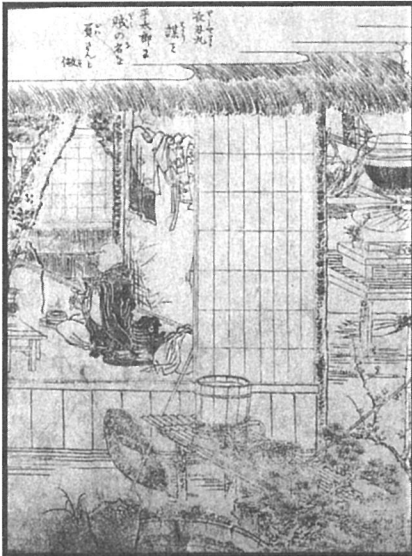
當吉此光景を看るに、不便にもまた浅猿く、その志を果さす心にて、屍をば母が塚の側に埋め、さて彼財布を懐にし急ぎ家に還れば、妻卯木は夫の帰りの遅きを待たず、寐もせで緑丸に添乳しつうち案じ居たる処へ、漸やく帰り来つれば、はじめて心おちる、はやくも起出、「やよいかに。わが夫何とて今宵は帰り給ふことの遅くはおはしつるぞ。奴家が心も想ひやり給へ」といふに、當吉、「さこそおはしつらん。われもはやく帰らんとせしをりから、しかくの事こそありし」と、彼搭膊を出し、山より帰らんとせし道にて、阿古根の夜叉九景、腕を殺さんとするに出会、廿一を彼を救はんと賊等を追失ひしことより、景腕が最期に望みいひ聞えたること、またその次に景腕が屍を埋ししことに至り渾て脱なく物語すれば、卯木は且感じ且哀み、「景腕がことき孝心のものゝ志を果さしやり給はんは幾許の善根なれば、明日はいかならん法師をも頼み、親子の仏事を営給へ」とあるに、

當吉、「我素より其志也。天明はとく事を計ん」と、その夜は寐て勞れを休ひぬ。

さても程なく天明にければ、夫婦とく起て朝饌などしたるめ、平太郎は僧を頼み来らんと立出んとするを、卯木ひきとどめていふ、「昨夜はいかならん僧なりと請し給へといひしかど、此地方は辺鄙にして然るべき智識もおはさねば、願はくは昔より熊野山に住給ふ裸行上人を頼みまゐらせんはいかに」とあるに、平太郎、「此事われも心付ざるにはあらねど、彼上人里に出給ふは廿一ウ何時とも量られねば、それをまたんは彼が志しを無にするに似れり。よりにてまづ青道心にもあれ、頼み来て経を讀さし、また二人が塚に印の石碑を建んと想ふなり」と聞ゆるに、「そはよき処に想ひつかせ給へり。さらばとく何かのこゝとを整へておはせよ」と、夫を送りて門辺に出たる折しも、年老し道心の過行を見て、「こは幸のことなり」と夫婦斜ならず喜び、これを呼とどめ、「わが家に志す仏事のはべれば、回向をし給はれ」と懇懇に頼み聞ゆれば、道心子細なく諾ければ、「忝し」と裏に請し、心ばかりの齋など食さし、さて仏壇の前にあやしげなる案を居、

これに香花を供へ、「いさ」といふに、僧は心得、やがてそこに到り既に回向をはじめけり。此間に平太郎は石工がもとにと出行ぬ。

とかくして后門辺に案内を乞ふ者あり。卯木は誰人やと立出て見るに、いと大き(廿二才)挿絵(廿二ウ・廿三才)やかにいかつげなる漢子、腰に長き刀を横たへたるが、仁王のごとく立はだかり、「家主は家におはさずや」といふに、卯木、「主は用のごとはべりて、目今他に出行候ひぬ」と回答すれば、「爾あらば御身に申べし」とて、二匹の緋を与へていへりけるは、「昨夜緋商人を行劫しつるを、配当申也」といひさして出行んとするに、卯木驚き慌忙ひきとどめ、「こは心を得ぬことを聞え給ふ。奴家が夫は獵夫こそすれ、正なき事はせぬものを、足下等の行劫し給ふものを分か取るべき縁故なし。想ふに門差へやし給ひつらん。とくく持帰り給へ」と、緋をとつて返し与ふれば、彼漢子冷笑ひ、「おん身が夫われくが群に入り給へばこそ世を易ふ過するにあらずや。その妻としてしらすがほするはいと心悪し。猜するに夫の生産を人に知らさぬ為に爾答給ふにや。そはさもしき心なり。(廿三ウ)是



卷四 廿二ウ・廿三才

を思へば似るものは夫婦とやら。世の常言のごとく、平太郎もさもしき心あり。昨夜熊野山にて盲人を殺し多くの金を奪ひしかど、みなおのが物にせんと想ふてや、今におゐて我々へは露ばかりも聞ざれど、われ／＼はさる正なき心はなく、予て定たる法をまもり、獲ものをば斯のごとく配分れり。帰り給はざり此事よく聞えてよ」と、再び件の絹を投返し足早にこそ出さりぬ。卯木は今の漢子がいへるを熟々聞くに、昨夜盲人を殺し金を奪ひしとあるに疑ひおもひ、「こは賊の云へるが誠か。わが夫は正なき心はおはさねど、貧苦に迫ればもしや邪なる心の出来やし給はんか」と、とさまかうさま想ひ煩ひ、「何まれ此事他に漏ては一大事ぞ」と心づくにつけ、奥なる法師はいかに聞やしつらんかと、さし覗き見れば、経ばかりありてその人は居らず。(廿四才)「こは何方へ行しやらん」と、狭き家の隈々を探せど、影だに看へず。只後の垣をかきやぶり人の逃れ出たるさまなるに、あやしみ驚き、「彼法師今の漢子がいひ罵るを漏聞、強盗などの家なりと想ひ誤り、逃去りぬとおぼえたり。斯ては此事云触されんは必定なり。しかありせば忽ち夫の身

に禍や来ぬらん。嗚呼奈何にしてよからめ。わが夫はやく帰りませ」と、門辺に出て待処に、平太郎當吉は石工の処に往て石碑の模様委しくあつらへ置き、何気なく帰り来るに、卯木は夫の影の見ゆるに、山路にて朝日を望みし想ひをなし、手をあげてさし招けば、平太郎不審つゝ急ぎ門辺に還り来て、妻に對ひ、「家裡には客人もあるに、など此処には許み居給ふ」と問へば、卯木涙さしくませ、「その客人の居らざるにつき、一大事こそきてきたりぬ。とくまつ這裡へ」(廿四才)と伴ひつれて裡に入り、平太郎が側に近く居より、件の絹を出し、彼大漢子が来りし事より、看経せし法師が逃帰りしことを、詳らかに物語り、且いふやう、「おん身実に彼漢子がいへるごとくならば、禍忽ち来て奈何なる重き刑にか遭給はん。然るときはわれ／＼親子はいかになるとおぼするぞ。うらめしの御意や。渴しても盗泉の水は飲ずとやらん、古の賢き人はその地の名だに忌厭へり。まひて自ら非義無道の行状をして多くの金銀を奪ひ、一時の飢餓を免るとも、いかで天の誅をば逃らるべき、終には非命の死を遂、ながき汚命を残し給ふのみか、先相までも恥しめ給はん」

と恨み嘆くに、平太郎あまりのことに、呆果とかふの回答もせざりしが、やゝあつていひ出けるは、「御身が目今聞へ給ふ処、ひとつとしておぼえなきことなり。想ふに此事は、(廿五才) 夜叉丸が謀とこそおほゆれ。故いかにとなれば、彼はわが仇にて、我かくてあるは尤忌み厭ふ処なるに、殊に前に吉野におゐて戦ひし時もわれにうち負また昨夜出会しときも勝ことあたはで逃去りたれば、逆も相對して克ことならねば、謀をもてわれを盜賊なりといひ触さし、公の力をかりて討たんとする結構にぞあるらん。是や疫神もて仇を報ゆといふ諺のことくなるべし。われ貧しといへども、奈何ぞ緑林の群に入て非道を行ふべき。赤心をば皇天禱し給ふ。彼いかなる謀を做とも、などや冤罪に殺さるべき。いたくな想ひくし給ひそ」と聞ゆるに、卯木は夫の心はしりながら、前の漢子が言語に迷ひ深心を悩しに、今夫の分疎を聞、忽ち疑念を晴し喜ぶとはいへど、また彼法師がなき名をいひ触らさんことを記掛想ひ、「命を承り心をちゐたり。(廿五才) 女の鈍して一時疑ひまいらせしをばみゆるし給へ。そはおき前の法師がよしなきことを聞おぢして走りたれば、

なき名をいひ触さんは必定なり。爾あるときは終に公に聞え、いかなる咎をか蒙り給はん。そのときはたとへて張氏が弁ありとも、世を忍び給ふ身なれば、明白には云解給ふこと難し。こはいかにせさし給ふぞ」とあるに、平太郎も、「わが身のうへを願れば、父は此地方の事につき聖慮に差ひ自害し果たるなるに、その子としてこゝに忍び居るは、何とやらん上を恐れぬに似たれば、若事あらば奈何せばや」と、深く心を悩すときこそあれ、門辺より村長が声とし、「何事かはしらねど、都より下り給ひし越中次郎兵衛どの、足下に用のことあればとく誘引来よと敵に命給へり。只今われと俱にいざ給へ」といそがしたつれば、夫婦は愕(廿六才) 然と驚き、「早くも事漏てこゝに及ぶにや」と躊躇て居るを、村長はその心をしらず、只願に催促にぞ、平太郎今はせんすべなく、「もしわれを盜賊なりといはゞ、夜叉丸等を捉へさせ、対決をして事を正さん。なかゝに名を忍び姿を隠さんば然るべからす」と心を定め、既に出ゆかんとするを、卯木は泣しく引とゞめ、物言かけんとしたりしかど、村長等が手まへをかね、一言をも得いはず、たゞさめど、とうち嘆けば、平

太郎その心を猜し、「何事もみなわが胸中にあり。深く心を悩しぞ。今に帰り来ぬべきに」と事もなげに云すて、
村長と俱にうち連て急ぎわが家を立出ぬ。今這平太郎當吉、村長と俱に盛嗣かもとに行こと、是善か悪か、そは次の巻に分解るを看て知り給へ。

世三間堂
棟材奇伝 柳の糸巻之四 (廿六ウ)

(以下、次号へ続く。)

(本学教授)